

罪惡の起源

どうして罪というものが起こったのか、なぜ罪があるのかということは、多くの人々の心を苦しめる問題であ

1

罪の存在に対する疑問

どうして罪というものが起こったのか、なぜ罪があるのかということは、多くの人々の心を苦しめる問題である。人々は、悪の働き、その恐るべき結果である不幸と悲しみを見て、いつたいなぜ限りない知恵と力と愛であられる神の主権の下にこうしたすべてのことが存在するのかと疑問をいだく。人間の説明できない神祕がここに
ある。人々は、半信半疑であるために、神のみ言葉の中には、つまりあらわされていて救いに不可欠な真理を、悟ることができないのである。なぜ罪というものがあるのかというのを調べるために、神が啓示されたことのない点まで追求する人たちがいる。そのため彼らは、この困難な問題を解決することができない。疑ったり、あ
さがしをしたりするような気持ちに動かされる人は、これを口実にして聖書のみ言葉を拒否してしまふ。なかに
はまた、言い伝えや誤った解釈のために、神のご品性、神の統治の性質、罪に対する神の取り扱ひの原則などに
ついての聖書の教えに暗くなり、悪という大問題について満足な理解を得ることができない者もある。

罪の存在を理由づけようとして罪の起源を説明することは、不可能である。しかし、罪の起源についてもその
処分についても、悪に対する神のすべての取り扱ひの中に、神の公義とあわれみが完全にあらわされているとい
うことに関しては、十分に理解できるのである。聖書の中に何よりもはっきり教えられていることは、罪が入っ
てきたことに対して神にはなんの責任もないということ、すなわち神の恵みが絶断的にとり去られたり、神の統
治に欠陥があったりしてそれが反逆の発生のきっかけになつたのではないということである。罪は侵入者であつ
て、その存在については理由をあげることができない。それは神秘的であり、不可解であつて、その言いわけを
することは、それを弁護することになる。もし罪の言いわけがあつたり、その存在の原因を示すことができたら、
それはもはや罪ではなくなる。罪についての唯一の定義は、神のみ言葉のうちに与えられている定義である。そ
れは「罪は不法である」ということである。すなわち罪は、神の統治の基礎である愛という大法則と戦つてい
る原則が、外にあらわれた結果である。

悪が入る前には、全宇宙には平和と喜びがあった。すべては創造主のみこころと完全に調和していた。神に対する愛が最高の位置を占め、お互いの間の愛はかたよっていないかった。神の独り子で、言葉であられるキリストは、永遠の父と一つであられた。すなわち、その性質において、品性において、目的において一つであり、この宇宙全体で、神の計画と相談にあずかることのできるただひとりのおかたであった。天の父は、キリストによつて、天の全住民を創造する働きをされた。「万物は、天にあるものも地にあるものも……位も主権も、支配も權威も、みな御子にあつて造られた」(コロサイノ一六)こうして全天は、キリストに対して、天父に対するのと同じ忠順をあらわした。

愛の律法は神の統治の基礎であるから、すべての被造物の幸福は、この偉大な義の原則に完全に一致することにあつた。神は、すべての被造物の愛の奉仕、すなわち、神の二品性に対する賢明な理解から生ずる尊敬をお望みになる。神は、強制的な忠誠をお喜びにならないで、だれでも神に自発的な奉仕をささげるように、すべてのものに意志の自由を与えておられる。

罪の侵入

2

しかし、この自由を悪用した者があつた。キリストに次いで最も神から栄誉を受け、天の住民の中で最高の権威と栄光を与えられていた者から罪が始まつた。ルシファーは、墮落する前は、清く汚れない、おおうことをなすケルビムの中の第一位の者であつた。「主なる神はこう言われる、あなたは知恵に満ち、美のきわみである完全な印である。あなたは神の園エデンにあつて、もろもろの宝石が、あなたをおおっていた。……わたしはあなたを油そそがれた守護のケルブと一緒に置いた。あなたは神の聖なる山にいて、火の石の間を歩いた。あなたは造られた日から、あなたの中に悪が見いだされた日まではそのおこないが完全であつた」(エゼキエル書二八ノ一二—一五)。

ルシファーは、神の恵みのうちにとどまつて、全天使の愛と尊敬を受け、ほかの者たちの祝福となり創造主の栄えをあらわすために、その高貴な能力を働かせることができたのである。しかし預言者は、「あなたは自分の美しさのために心高ぶり、その輝きのために自分の知恵を汚した」と言っている(エゼキエル書二八ノ一七)。しだいにルシファーは、自分を高めたいという思いをほしいままになつた。「あなたは自分を神のように賢いと思つている」(同二八ノ六)「あなたはさき心に心のうちに言った、「わたしは天にのほり、わたしの王座を高く神の星の上におき、北の果なる集会の山に座し、雲のいただきにのほり、いと高き者のようにならう」」(イザヤ書一四ノ一三、一四)。ルシファーは、被造物の最高の愛情と忠誠心を神にささげさせようとしてないで、彼らの奉仕と服従とを自分に向けさせようと努力した。この天使たちの君は、無限なるおかたであられる神がみ子にお与えになつてきた栄誉をほしがつて、キリストだけがお用いになれる大権である権力にあこがれた。

全天は、創造主の栄光を反映し、神を賛美することを喜びとしていた。そして神がこのようにあがめられている間は、すべては平和であり、喜びであつた。しかしいま、不協和音が天のハーモニーをそこなつた。創造主のご計画とは逆の、自分に仕え自分を高める思いが、神の栄光を第一としていた者たちの心に、悪の子感を感じさせた。天の会議は、ルシファーに嘆願した。神のみ子は、創造主が偉大であられ、恵み深く、公義の神であられること、そして神の律法は聖にして不変の性質のものであることを、彼に示された。神ご自身が天の秩序をお定

めになつたのであるから、ルシファーがそれを無視することは、創造主の功名をけがし、自分自身を破滅させることになるのであつた。しかし、無限の愛とあわれみをもつて与えられた警告は、反抗の精神をひき起こしただけであつた。ルシファーはキリストに対するしつとへの念にかられ、ますます決意を固めた。

自分自身の栄光に対する誇りは、主権を求める欲望を助長した。ルシファーは自分に与えられた高い栄誉を神の賜物として認めず、創造主に対して感謝の念を起さなかつた。彼は自分の聡明さと高い地位を誇り、神と同等になることを熱望した。彼は天の住民から愛され、尊敬されていた。天使たちは彼の命令を実行することを喜び、彼はすべての天使たちになさる知恵と栄光を身につけていた。しかし神のみ子は、天の君主として、すなわち天の父と同じ権力と権威をもつておられるおかたとして認められていた。キリストは、神のすべての相談に參加しておられたが、ルシファーはキリストのように神の目的を知ることを許されていなかった。「なぜキリストが主権をもつておられるのか。なぜキリストがこのようにルシファーよりもあがめられるのか」と、この強力な天使は疑つた。

ルシファーの悪だくみ

3

ルシファーは、神のみ座のすぐ近くにある自分の座を離れて、天使たちの間に不満の精神をひろめるために行つた。彼は神秘的な秘密をもつて働き、一時は神に対する尊敬をよそおつて自分の真意をかくし、天の住民を支配している律法によつて不必要な束縛が加えられているとほめかしながら、律法に対する不満の念を引き起こそうと努力した。天使たちの性質は聖なのだから、彼らは自分自身の意志の命令に従ふべきであるといふ説いた。神がキリストに最高の栄誉をお与えになつたことは、自分に対する不当な待遇であると言つて、彼は自分自身に対する同情を引き起こそうと努めた。彼は、自分がつと大きな権力と栄誉とを求めるのは、決して自分を高めるためではなく、天のすべての住民のために自由を確保するためであつて、こうすることによつて彼らもつと高い身分になれるのだと主張した。

神は、大いなるあわれみをもつて、長い間ルシファーに対して忍耐された。彼は、最初不満の念にかられたときも、あるいは忠誠な天使たちの前で虚偽の主張をしはじめたときでさえ、その高い地位からすぐに追い出されるようなことはなかつた。彼は長い間天にとどまつていた。何度も何度も彼には、悔い改めと服従の条件のもとに許しが提供された。彼にそのまちがいを自覚させるために、無限の愛と知恵であられる神だけが考えだすことがおできになるような努力が払われた。不満の精神というものは、それまで天で見られたことがなかつた。ルシファー自身も、最初は、自分がどちらへ押し流されているのかわからず、自分の感情のほんとうの姿がわかつていなかった。しかしルシファーは、自分の不満が理由のないものであることがわかると、彼は、自分が誤つていたこと、神の主張が正当であること、また事実を全天の前に明らかにすべきであることを自覚した。もし彼がそうしていれば、彼は自分自身と多くの天使たちとを救つていたかもしれない。このとき、彼は、神に対する忠誠を完全に放棄していたわけではなかつた。彼は守護のケルブとしての地位を捨てたけれども、もし彼が創造主の知恵を認めて自分から進んで神のみもとに帰り、神の大いなるご計画のうちに定められた地位を占めることに満足したら、彼はその地位に復帰させられていたのである。しかし高慢心に妨げられて、彼は服従しようとしなかつた。彼はあくまでも自分の行動を弁護し、悔い改めの必要はないと言ひ張り、創造主に対する大争闘に

完全に身を投じてしまった。

4 欺瞞の大計画

今や彼は、部下の天使たちの同情を得るために、その偉大な知能の全能力をもって欺瞞の業に打ち込んだ。キリストが彼に警告と勸告をお与えになつたことさえ曲解されて、彼の反逆的な計画に利用された。彼は自分を親しく信頼し、かたく結び合つていた者たちに向かつて、自分は神からまぢがつた判断をされている、自分の地位は尊敬してもらえない、また自分の自由は制限されようとしていると語つた。彼はキリストの言葉をまぢがつたふうに伝えただけでなく、キリストは天の住民の前で彼に屈辱を与えようと言つて、ごまかしと露骨な虚偽をもって神のみ子を非難した。彼はまた、自分と忠実な天使たちとの間に、ありもしない問題を引き起こそうとした。彼は、忠誠心を失わせて自分の側に完全に引き入れることのできなかつた者たちに向かつて、天の住民の利益に対して冷淡であると言つて非難した。彼は自分自身をしている行為を、神に忠誠を保っている者たちと行爲をまぢがつたように伝えるという手を用いた。神の御目的について巧妙な議論をすることによって天使たちを困惑させるのが、彼の政策であつた。彼は単純なことの二つ一つに神祕の衣を着せ、また巧妙に曲解して、神の最も明白な言葉に対して疑いを投げかけた。彼は神の統治と密接に関連した高い地位を占めていたので、彼の言うことにはいつそう大きな力が加わり、多くの者が引きずられて彼に加担し、神の權威に対する反逆に加つた。

賢明な神は、このような不満の精神が積極的な反乱に発展するまで、サタンがその行為を進めるのをゆるさされた。すべての者が、サタンの計画の真相と傾向とを知るようになるためには、彼の計画を十分に発展させる必要があつた。ルシファーは油をそそがれたケルブとして、非常にあがめられていた。彼は天の住民から非常に愛されていたので、彼らに対する影響力は大きかつた。神の統治には天の住民だけでなく、神がお造りになつたすべての世界が含まれていたため、サタンは、天使たちを反逆に加はらせることができるならば、他世界もまきこむことができると考えた。サタンは、自分の目的を達するために、詭弁と虚偽とを用いて、巧妙に彼の疑問点をもちだした。彼の欺瞞の能力は大したものであり、また虚偽の仮面で変装することによって、彼は有利な立場を得ていた。忠誠な天使たちでさえ、彼の本性を十分に見分けたり、また彼の行為がどこに向けられているかを見たりすることができなかつた。

サタンはもともと非常な榮譽を受けていたのであり、またその行為のいっさいが神祕に包まれていたので、彼の行為の真相を天使たちの前にはばくことは困難であつた。罪は、完全に姿を現はすまでは、それがどんなに邪悪なものであるかがわからない。それまで神の宇宙には罪というものがなかつたので、天の住民は罪の性質と邪悪さについてなんの概念も持つていなかった。彼らは、神の律法を無視することから生じる恐るべき結果を見分けることができなかった。サタンは、最初には神に対する忠誠をもつとらしく告白することによつて、自分の行為をかくしていた。彼は、神のみ栄え、神の統治の安定、天の全住民の幸福を増進しようとしているのだと主張した。部下の天使たちの心に不満を吹き込みながら、彼は、不満を取り除こうとしているかのようにたくみに

見せかけた。彼が神の統治の秩序と律法の変更を強調したときも、天の調和を保つためにはそうすることが必要であるというふうに見せかけた。

5 反逆の結果

罪を取り扱われるにあたって、神は義と真実だけをお用いになることができた。サタンは、神がお用いになることのできないもの、すなわち追従と欺瞞とを用いることができた。彼は神のみ言葉を偽り、神の統治の計画を天使たちの前にまらちがつて伝え、神が天の住民のために律法と規則を定められたのは正しくない、また神が被造物から服従と従順とを要求されるのは、ただ神がご自身を高めるためであると主張した。そこで、すべての世界の住民はもろろん、天の住民の前に、神の統治が正しく、神の律法が完全であることが実証されねばならなかった。サタンは、自分こそ宇宙の幸福を増進しようとしているのだと見せかけていた。この横領者の本性、彼の真の目的を、すべての者にわからせねばならなかった。彼がその邪悪な業によって本性を暴露するまで、時間を与えねばならなかった。

サタンは、彼自身が天に引き起こした不和を、神の律法と統治のせいにした。すべての悪は、神の政治の結果であると彼は断言した。彼は、神の法令を改正するのが自分の目的であると主張した。そこで彼は、自分の主張の内容を証明させ、彼がもくろんでいる神の律法の変更の結果がどうなるかを示させる必要があった。彼自身の行為が彼を罪に定めるのでなければならなかった。サタンは初めから、自分は反逆してはいない、と主張していた。全宇宙はこの欺瞞者の仮面がはがれるのを見なければならぬのであった。

サタンをこれ以上とどめておくべきではないと決定されたときさえ、無限の知恵にいます神は、サタンを滅ぼされなかった。ただ愛の奉仕だけが神に受け入れられるのであるから、神に対する被造物の忠誠は、神の公義と慈愛とに対する確信に基づかねばならない。天と他世界の住民たちは、まだ罪の本性とその結果を理解する用意ができていなかった。サタンを滅ぼしてしまつたら、神の正義とあわれみとを認めることができなかつたであろう。もしサタンの存在がたちまち抹殺され逆せしまつたら、彼らは愛よりもむしろ恐怖から神に仕えたのであろう。欺瞞者を感化を完全に滅ぼすことも、反逆の精神を根絶することもできなかつたであろう。悪は十分に成熟させねばならなかった。永遠にわたる全宇宙の幸福のために、サタンの原則を十分に發揮させる必要があった。それは、すべての被造物が、神の統治に対するサタンの非難の真相を知り、神の公義とあわれみ、また神の律法の不変性が、永遠に疑問の余地なきものとなるためであった。

サタンの反逆は、きたるべきすべての時代にわたって、全宇宙にとって一つの教訓、すなわち罪の本性とその恐ろしい結果についての永久的なよき教訓となるのであった。サタンの支配がもたらすもの、人と天使たちに及ぼすその影響は、神の権威を無視することがどんな結果になるかを示すのであった。それはまた、神のお造りになつたすべての被造物の幸福は、神の統治及びその律法の存在と切っても切れない関係にあるとうことを証明するのであった。このようにして、この恐るべき反逆の実験の歴史は、すべての聖なる知者たちにとっての永久的な保障となり、彼らが不忠の性質についてだまされることがないようにし、彼らが罪を犯してその刑罰を受けるようなことがないようにするのであった。

天における争闘が終わるそのまぎわまで、この横領者サタンは、自分が正しいと主張し続けた。この反逆の指導者は、すべての共鳴者たちとともに幸福な住み家から追放されなければならないことが布告されたとき、大胆にも創造主の律法に対する軽べつを口に出した。彼は、天使たちは支配される必要はなく、自分自身の意志に従うべきで、この意志こそ、いつでも彼らを正しく導くものであるという主張をくり返した。彼は、神の律法は彼らの自由を束縛するものであると言つて攻撃し、このような律法を廃止することが自分の目的である、天の万軍はこの束縛から解放されて、もつと高貴なもつとすばらしい身分になるのだと断言した。

サタンとその軍勢は、口をそろえて、自分たちの反逆のところがすべてキリストのせいにし、もし自分たちが**誣責**されなかつたら反逆はしなかつたのだと言明した。このようにして反逆のかしらサタンとそのすべての共鳴者たちは、神の統治を倒そうとむだな努力をし、しかも、自分たちは圧倒的な権力の、罪のない犠牲者であると言いつ張つて、かたくなに、大胆に不服従を続けたため、ついに天から追放された。

天で反逆を起こしたのと同じ精神が、今もなお地上で反逆を起こさせている。サタンは天使たちに対して用いたのと同じ政策を、人類に対して用いてきた。彼の精神は、今、不従順の子らを支配している。サタンと同じように、彼らは神の律法の拘束を打破しようとし、律法に違反することによって人々に自由を約束する。罪に対する**誣責**は、依然として憎悪と抵抗の精神を呼び起こす。神の警告の言葉が良心に訴えられると、サタンは、人々に自分は正しいのだと思わせ、彼らの罪の行為に他人の共鳴を求めさせる。彼らは自分の誤りを直さないうで、かえつて**誣責者**が問題の唯一の原因でもあるかのように、その**誣責者**に対して憤慨する。これが義人アベルの時代から今日に至るまで、罪をあえて責める者に対して示されてきた精神である。

サタンは、天において行なつたように、神のご品性をまちがつて伝えることによって、神を苛酷で圧制的なおかたであると思わせ、人類を罪にさせつた。そしてそれが成功すると、サタンは、神の不当な束縛が、彼自身の反逆を引き起こしたように、人類の墮落を引き起こしたのだと宣言した。

しかし永遠なる神は、ご自分の品性について自らこう宣言しておられる。「主、主、あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、いつくしみと、まこととの豊かなる神、いつくしみを千代までも施し、悪と、とがと、罪とをゆるす者」しかし、罰すべき者をば決してゆるさず」(出エジプト記三四ノ六、七)。

神は、サタンを天から追放することによって、ご自分の公義を宣言し、み座の栄えを保たれた。しかし、人類がこの背信的な精神の欺瞞に負けて罪を犯したとき、神は墮落した人類のためにご自分の独り子を死なせることによって、神の愛の証候をお与えになつた。この**贖罪**のうちに、神のご品性があらわされている。十字架という力強い証候は、ルシファーが選んだ罪の道は決して神の統治の責任ではないことを、全宇宙に証明している。

キリストに対するサタンの挑戦

救い主の地上でのご生涯の間、キリスト対サタンの戦いにおいて、この大欺瞞者の品性が暴露された。世の救い主に対するサタンの残酷な戦いほど、サタンに対する天使たちと忠実な全宇宙との同情を失わせるのに効果的であつたものはなかつた。キリストに対して屈服を要求したあの大胆な冒瀆、キリストを山の頂きと高の頂上に連

れて行つた彼の偉大な大胆さ、目がくらむような高い所から身を投げるようキリストにすすめることによって暴露された悪意ある計画、あらゆるこちらへとキリストを追い回した絶えざる敵意、祭司や民たちの心をあおりたててキリストの愛を拒否させ、ついには「十字架につけよ、彼を十字架につけよ」と叫ばせたことなど——こうしたすべてのことが全宇宙を驚かせ、憤慨させた。

世の人々をしてキリストを拒むようにさせたのは、サタンであった。悪の君はイエスを滅ぼすために、彼のあらゆる力と悪知恵を傾けた。というのは彼は、救い主のあわれみと愛、同情とやさしさが、神のご品性を世の人々にあらわしているのを見たからであった。サタンは神のみ子が口にされる一つ一つの主張と論争し、人間を手先に使つて救い主の生涯を苦しめと悲しみて満ちた。イエスの働きを妨げようとして彼が用いた詭弁と虚偽、不従順の仕方によつてあらわされた憎悪、比類のない善良な一生を送られた神のみ子に對するサタンの残忍な非難、こうしたことはすべて根深い報復の念から出たのであった。閉じ込められていたしつと、うらみ、憎悪、ふくしゅうの炎は、神のみ子に對してカルバリーで爆発し、一方全天は恐怖のうちに沈黙してこの光景を見つめた。大いなる犠牲が完結されたとき、キリストは昇天されたが、彼は「父よ、あなたがおわたしに賜つた人々が、わたしのいる所に一緒にいるようにして下さい」との懇願をささげられるまでは、天使たちの賛美を受けようとしてなかつた(ヨハネ一七ノ二四)。そのとき天の父のみ座から、言い表わしようのない愛と力とをもつて、「神の御使たちはことごとく、彼を拜すべきである」との答えが与えられた(ヘブル一ノ六)。イエスには少しの汚れもなかつた。イエスの屈辱は終わり、その犠牲は完結し、すべての名にまさる名がイエスに与えられた。

今やサタンの不義は言いわけの余地がなくなつた。彼は、偽り者、人殺しとしての彼の本性を暴露してしまつた。もしサタンが天の住民を支配することを許されたら、自分の権力の下にあつた人の子らを支配したのと同じ精神で支配したであろうということが、明らかになつた。彼は神の律法を破ることによつて自由と高い身分が得られると主張していたが、その結果は束縛と墮落であることが明らかになつた。

7 贖いの計画の意味

神のご品性とその統治に対するサタンの偽りの攻撃は、その真相をさらけ出した。彼は、神が被造物に服従を要求されるのは、ただ神ご自身を高めるためにすぎないと非難し、創造主はすべての者に自己犠牲を強制しながらご自分は寛大にも犠牲もしておられないと主張してきた。今や、墮落した罪深い人類の救いのために、宇宙の支配者であられる神が、その愛によつてのみなし得られる最大の犠牲をお払いになつたことが明らかになつた。なぜなら「神はキリストにおいて世をご自分に和解させ」られたからである(コリント第二・五ノ一九)。また、ルシファーは榮譽と主権とを望んだために罪の門戸を開いたが、一方キリストは罪を滅ぼすために身をいやくして死に至るまで従順であられたことが明らかになつた。

神は反逆の原則に嫌悪を示しておられた。全天は、サタンが罪に定められたことにも、人類が贖われたことにも、神の公義があらわされたのを見た。ルシファーは、神の律法が不変なものであり、その刑罰は免れることができぬものであるならば、これを犯す者はみな永久に創造主の恩恵から除外されると言明していた。彼は、罪深い人類は贖われる見込みがなく、したがつて彼の当然のえじきであると言つていた。ところがキリストの死は、人類のための覆すことのできなない証拠であつた。律法の刑罰は、神と等しいおかたであられるキリストに負わさ

れた。そして人は、自由にキリストの義を受け入れることができ、謙遜と悔い改めの生活を送ることで、神のみ子が勝利されたように、サタンの方に勝利することができるのであった。このように、神は正しいおかたであって、しかも、イエスを信じるすべての者を義とされるおかたなのである。

しかし、キリストが地上にくだって苦難と死を受けられたのは、ただ人類の贖いを成し遂げるためだけではない。キリストは「律法を大いなるものとす」(英語訳)これを「光栄あるものとする」ために来られたのである。この世界の住民が律法を正しく認識するようにするだけでなく、神の律法が不変なものであることを、宇宙の全世界に対して証明するためであった。律法の要求が廃止できるものであったら、神のみ子は罪を贖うためにご自分の生命をささげられる必要はなかったのである。キリストの死は、律法が不変であることを証明している。罪人を救うために、父とみ子が限りない愛に迫られて払われた犠牲——この贖いの計画以外に方法はなかった——は、公義とあわれみが神の律法と統治の基礎であることを全宇宙の前に証明している。

8 罪の根絶

審判が最終的に執行されるとき、罪の理由は存在しないことが明らかになる。全地の審判者が、サタンに向かって「あなたはなぜわたしにそむき、わたしの國の民を奪ったのか」と聞きただされるとき、悪の創始者であるサタンはなんの言いわけもできない。どの口も閉じられ、叛逆者の全軍は言葉もないのである。

カルバリーの十字架は、律法が不変なものであることを宣言しているとともに、罪の価は死であることを宇宙に宣言している。「すべてが終わった」との救い主の臨終の叫びによって、サタンに対するとむらいの鐘が鳴らされた。長い間継続されてきた大争闘はここに決定し、悪の最終の根絶が確実となった。神のみ子は、「死の力を持つ者、すなわち悪魔を、ご自分の死によって滅ぼすため、自ら墓の門をくぐられた(ヘブル二—四)。ルシファーは自分が高い地位にのぼりたいとの望みから、「わたしは天にのぼり、わたしの王座を高く神の星の上におき、……いと高き者のようにならう」と言ったのであったが、神はこう宣言しておられる。「わたしは……あなたを地の上の灰とした。……あなたは……永遠にうせはてる。」「万軍の主は言われる、見よ、妒のように燃える日が来る。その時すべて高ぶる者と、悪を行う者とは、わらのようになる。その来る日は、彼らを焼き尽して、根も枝も残さない」(イサヤ書二四—二三、一四、エゼキエル書二八—一八、一九、マラキ書四—一)。

全宇宙は、罪の性質とその結果について証人となるであろう。罪を徹底的に根絶することは、世の初めだったら天使を恐れさせ、神の栄えを汚したのであるが、いまでは、神のみこころを行なうことを喜び、心のうちに神のおきてをもっている宇宙の全住民の前に、神の愛を立証し、そのみ栄えを確立するものとなる。もはや悪は再び現われてこない。「思難かさわて起こらじ」と聖書には言われている(ナホム書一—九文語訳)。サタンが束縛のくびきであるとならなくなった神の律法は、自由の律法として尊ばれる。試練を通り越してきた被造物は、はかりしれない愛と限りない知恵のおかたとしてそのご品性が自分たちの前に十分にあらわされた神に対し、忠誠をひがえすようなことはもはや二度とないのである。

You have just read all or most of chapter 29 from the book, *The Great Controversy, in the Japanese Language*

This chapter, other chapters, and part or all of the entire book are available on special order in quantity amounts in 23 languages

TRAIL GUIDES - BOX 300, ALTAMONT, TN 37301 USA

FOR FURTHER INFORMATION AND LITERATURE, PLEASE CONTACT:

中世の靈的暗黒時代

「不法の者」の出現

1

使徒パウロは、テサロニケ人への第二の手紙のなかで、法王権の樹立をもたらす大背教のことを預言した。彼は、キリストの日が来る前に、「まず背教のことが起り、不法の者、すなわち、滅びの子が現れるにちがいない。彼は、すべて神と呼ばれたり拝まれたりするものに反抗して立ち上がり、自ら神の宮に座して、自分は神だと宣言する」と言った。パウロは、さらに、「不法の秘密の力が、すでに働いている」と信者たちに警告している（テサロニケ第二二・三、四参照）。早くも彼は誤りが教会に侵入し、法王権の発原に道を備えるのを見たのであった。

徐々に、最初はこつそりと静かに、そしてそれから勢力を増し、人心を支配するようになるにつれて、もつと公然と、「不法の秘密」はその欺瞞的冒険的な動きを進めていった。異教の習慣は、目につかないほど少しずつキリスト教会の中にはいつてきた。教会が異教から激しく迫害を受けていた間は、一時妥協と迎合の精神は抑えられていた。しかし迫害がやんで、キリスト教が王侯の宮廷や宮殿にはいつたとき、教会はキリストと使徒たちのつつましやかな単純さを捨て、異教の司祭や王侯たちの虚飾と華美に倣った。そして神の子要求のかわりに、人間の理論や伝説を取り入れた。四世紀の初期に、コンスタンティヌス帝が名ばかりの改宗をして、一般から大いに歓迎された。そして、世俗が信心深い様子をして教会内にはいつてきた。今や、墮落は急速に進んだ。異教は征服されたように見えながら、勝利者となった。異教の精神が教会を支配した。その教義と礼典と迷信とが、キリストの弟子であると公言する人々の信仰と礼拝に織りこまれた。

この異教とキリスト教の妥協が、神に反抗して立ち上がると預言された「不法の者」を出現させることになった。偽りの宗教のあの巨大な組織は、サタンに権力が生じた一大傑作であって、自分の意のままにこの地上を支配しようとする彼の努力の記念碑である。

サタンは前にも一度、キリストと妥協しようとしたことがあった。彼は試みの荒野で、神のみ子のところに来て、この世のすべての国々とその栄華とを見せ、もしキリストが暗黒の君の主権を認めさせれば、すべてを彼の手に与えようと言った。キリストは偽惑な誘惑者を諷刺し、追い払われた。しかしサタンは同じ誘惑を人間の前に差し出して、大きな成功を取っている。教会はこの世の利益と栄華を手に入れるために、地上の有力者たちの賛成と支持を求めるようになった。そして、このようにしてキリストを拒否したことによって、教会はサタンの代表者であるローマの司教に忠誠をつくすに至った。

法王は全世界のキリストの教会の目に見える頭であつて、世界各地の司教と牧師に対する至上権が与えられている、というのがローマ・カトリック教会の主要教義の一つである。そればかりではない。法王には、神の称号そのものが与えられている。彼は「主なる神、法王」と呼ばれ、誤ることがないといふとされてきた（付録参照）彼はすべての人間が彼を尊敬することを要求する。サタンは試みの荒野において主張したのと同じことを、今日もなおローマ教会を通じて主張している。そして無数の人々が、心から彼に尊敬を払っている。

しかし、神を恐れ敬うものは、キリストが、狡猾な敵の誘惑に対抗されたように「主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ」と言つて、神に逆らうこうした主張に立ち向かうのである（ルカ四ノ八）神はみ言葉の中で、だから人間を教会の頭にしたなどという暗示すら与えておられない。法王至上権説は、聖書の教えと全く相反するものである。法王は、横領による以外に、キリストの教会の上に権力を振うことはできない。

カトリック教徒は、プロテスタントを異端視しつづけ、真の教会から故意に分離したものであると言つてきた。しかしこうした非難は、むしろ彼らにこそ当てはまるのである。キリストの旗を捨てて、「聖徒たちによつて、ひとたび伝えられた信仰」から離れたのは、彼らであつた（ユダ三）。

サタンは、聖書が人々に、彼の欺瞞を見分け、彼の力に対抗できるようにさせることをよく知つていた。世の救い主でさえ、み言葉によつて、彼の攻撃を退けられた。キリストは攻撃されるたびに、永遠の真理の盾を用いて、「……と書いてある」と言われた。サタンのあらゆる誘惑に対し、キリストはみ言葉の知恵と力をもつて対抗された。サタンが人々の上に権力をふるひ、横領者的な法王権をうちたてるには、彼らを聖書について無知にしておかねばならなかつた。聖書は神を高め、有限な人間の真の立場を明らかにする。それゆゑに、その聖なる真理を隠し、抑圧しなければならぬ。ローマ教会はこの論法をとつた。数百年にわたつて、聖書の配布が禁止された。人々は聖書を読むことも、それを家を持つことも禁じられた。そして節操のない司祭たちや司教たちが、自分たちの主張を支持するためにその教えを解釈した。こうして法王は、地上における神の代表者、教会と国家に対する権威を与えられた者として、広く認められるようになった。

時と律法の変更

誤りを指摘するものが除かれたので、サタンは、思う存分に活躍した。法王権は「時と律法とを変えよと望む」と預言されていた（ダニエル書七ノ二五）。このことは、さつそく実行に移された。異教から改宗した人々に、偶像礼拝の代わりになるものを与え、こうして彼らの名ばかりのキリスト教受容を促進するために、聖画像や聖遺物崇拜が、キリスト教の礼拝のなかに徐々に取り入れられた。ついに公会議の布告によつて、この偶像礼拝制度が確立した（付録参照）。ローマ教会は、神を汚す活動の結びとして、憎越にも、偶像礼拝を禁じる第一条を神の律法から削除し、その欠けたところを補うために第十条を二つに分けたのである。

異教に譲歩する精神は、なおいつそ神の権威を無視する道を開いた。サタンは、教会の消められていない指導者たちによつて、第四条をも変更し、神が祝福し聖別された昔からの安息日（創世記二ノ二、三参照）を廃すうとした。そしてその代わりに、異教徒が「太陽の神聖な日」として守つていた祭日を高めようとした。この変

更は初めから公然と行なわれたのではなかった。最初の二、三世紀の間、すべてのキリスト者たちは真の安息日を守っていた。彼らは熱心に神をあがめ、神の律法は不変であると信じていたから、その戒めを熱心に清く守った。しかしサタンは、彼の代理者たちを用いて非常に巧妙に働き、その目的の達成をはかった。人々の注目を日曜日にひくために、それはキリストの復活を記念する祝日とされた。宗教的礼拝が日曜日に行なわれた。しかし、その日は娯楽の日とみなされておき、安息日が従来どおり清く守られていた。

サタンは、自分がなすげようとしている仕事に道を開くために、キリストの来臨に先だつて、ユダヤ人たちが安息日に苛酷な要求を増し加え、それを守ることを重荷にするようにさせていた。そしてサタンは、自分がそのようにして人々に安息日を厭厭させておきながら、今度はそれを利用して、安息日はユダヤ人の制度だとしてそれを軽べつした。キリスト者たちが、日曜日を楽しい祝祭日として祝う一方、サタンは彼らがユダヤ教に対する憎しみの表現として、安息日を断食の日、ゆううつな悲しみの日とするようにしむけた。

四世紀の初期、コンスタンティヌス帝は、日曜日をローマ帝国全土の公の祝日にするという布告を出した（付録参照）。太陽の日は、異教徒の国民に尊ばれ、またキリスト者たちからもあがめられた。それは、異教とキリスト教との相反する点を一致せよとする皇帝の政策であつた。彼は、教会の司教たちから、こうするよう勧められたのである。彼らは権力を渴望していたから、もしキリスト者と異教徒とが両方とも同じ日を守るならば、異教徒が名目だけでもキリスト教を信じるのを助長し、教会の権力と栄光を推し進めるものと考えた。しかし多くの敬虔なキリスト者たちは、次第に、日曜日にはいくぶんか神聖さがあると見なすようになつたものの、なお真の安息日を主の聖なる日とし、第四条の戒めに従つて守っていた。

3 偽りの安息日

大欺瞞者は、まだ十分にはその目的を達成していなかつた。彼は、キリスト教世界を彼の旗の下に集め、彼の代理人、すなわち、キリストの代表者であると主張する高慢な法王によって、力を振おうと決心した。半分しか改宗していない異教徒たち、野心満々の司教たち、そして世俗を愛する教会人々たちによって、彼は自分の目的をなしたとげた。いくたびか公会議が開かれて、教会の指導者たちが全世界から集められた。そのほとんどの会議において、神が制定された安息日が少しずつ低められると共に、日曜日はそれに応じて高められていった。こうして異教の祝祭日が、ついには神聖な制度としてあがめられるようになり、その反面、聖書の安息日はユダヤ教の遺物であると宣言され、それを守る者たちはのろむべきであると言はれた。

大背信者は、「すべて神と呼ばれたり拝まれたりするものに反抗して、自らをその上に高く上げることに成功した（テサロニケ第二・二ノ四）。彼は、全人類を生きた真の神へと誤ることなく向け、神の律法の唯一の戒めをあえて変更した。神は、第四条の戒めのなかで、天と地の創造主として示されており、それによってすべての偽りの神々との区別が明らかにされている。第七日が、人間の休息の日として聖別されたのは、創造の業の記念としてであつた。それは人間が、生ける神を、存在の根源、尊崇と礼拝の対象として、常に心に留めておくためであつた。サタンは人々に、神への忠誠をつくさせず、神の律法に従はせまいと努力している。それゆゑに彼は、神が創造主であることを指し示す戒めを、特に攻撃するのである。

今、プロテスタントの側では、キリストが日曜日に復活されたから日曜日がキリスト教徒の安息日になつたと

主張している。しかし、その聖書の証拠はない。キリストや使徒たちも、この日をそのように尊んではいない。日曜日キリスト教の制度として遵守することは、すでにパウロの時代に活動しはじめた「不法の秘密の力」にその起源をもつ（テサロニケ第二・二七）。しかし主は、いつ、どこで、この法王権の子とも言うべき日曜日の制度を迎え入れられたのであろうか。聖書が認めていない変更に対して、どのような確かな理由をあげ得るであろうか。

4 暗黒時代の開始

第六世紀に至って、法王権は確立した。その権力の座はローマに置かれ、ローマの司教が全教会の首長であると言われた。異教は法王権に地位を譲った。龍は獣に、「自分の力と位と大いなる権威とを」と与えた（黙示録一三〇二。付録参照）。こうして、ダニエル書と黙示録に預言されたところの、「二二六〇年間に及ぶ法王権の迫害が始まった（ダニエル書七〇二五、黙示録一三〇五七参照）。キリスト者たちは、神に対する忠誠を放棄して法王教の儀式と礼拝を受け入れるか、それとも、地下の牢獄に幽閉され、拷問や火刑、また斬首史のおでの生命を失うか、そのどちらかを選ばねばならなくなった。「しかし、あなたがたは両親、兄弟、親族、友人にさえ裏切られるであろう。また、あなたがたの中で殺されるものもあろう。また、わたしの名のゆえにすべての人に憎まれるであろう」というイエスの言葉が、ここで成就した（ルカ二二一六、一七）。迫害は、これまで以上に激しく忠実な人々に向けられ、世界は一大戦場となった。何百年もの間、キリストの教会は人里離れた場所に難をのがれた。預言者はこのように言っている。「女は荒野へ逃げて行つた。そこには、彼女が千二百六十日のあいだ養われるように、神の用意された場所があった」（黙示録一二〇六）。

ローマ教会が権力を握ったことは、暗黒時代の始まりを意味した。教会の権力が増すにつれて暗黒は深まった。信仰は、真の基礎であるキリストから、ローマ法王へと移された。人々は、罪の許しと永遠の救いを求めて神の子よりのたのむかわりに、法王や、法王が権力をゆだねた司祭や司教たちになつた。彼らは、法王はこの地上における彼らの仲保者であつて、法王によらなければだれも神に近づくことができない、と教えられた。さらに法王は神に代わつて彼らの前に立つ者であるから、絶対に服従すべきであると教えられた。彼の要求に従わない者が、最も厳しい罰をその心身に受けるのは、当然のこととされた。

こうして人々の心は神から引き離されて、誤りの多い残酷な人々に、いや、彼らを通して力を振うところの暗黒の君自身に向けられた。

罪は聖潔の仮面をかぶつた。聖書が圧迫され、人間が自分を最高のもつと見なすようになる。そこには、欺瞞と惑わし、汚れた罪悪しか期待できない。人間の律法と言ひ伝えとが高められるにつれて、神の律法を放棄するときに起る腐敗があらわれてきた。

真の宗教の危機

キリストの教会にとって危機の時代であつた。忠実な旗手はまことに少なかった。真理の証人たちもいなくなつたわけではないが、誤りと迷信が完全に勝利して、真の宗教は地上からぬぐい去られたように思われた時もある。

た。福音は見失われてしまった。しかし宗教の形式は増大し、人々は厳しい要求に苦しんだ。

彼らは、法王を彼らの仲保者として仰ぐだけでなく、罪を贖うために自分自身の行なひに頼らねばならないと教えられた。長い巡礼の旅、難行苦行、聖遺物崇拜、教会堂・寺院そして祭壇の建築、教会への大金納入——これらの行為、またそれに類した多くの行為が、神の怒りを和らげ、神の恵みにあずかるために要求された。あたかも神が人間のように、ささいなことに怒り、あるいは贈り物や苦行によってなだめられるかのように。

罪悪が一般に広く行なわれ、ローマ教会の指導者たちのなかにさえ及んでいたが、じかし教会の勢力は著実に増加していくように見えた。八世紀の終わりころ、カトリック教徒たちは、初期の教会においてもローマの司教は、現在有しているのと同じ宗教上の権力を持っていたと主張した。この主張を確立するためには、何かの手段を講じてそれを権威づける必要があった。そしてそれには、偽りの父が直ちに示唆を与えた。古文書が、修道士たちによって偽造された。これまで聞いたこともないような会議の布告が発見されて、法王が最も初期の時代から普遍的な至上権を持っていたことが確立された。そして、真理を拒否した教会は、これらの欺瞞をすぐさま承認した（付録参照）。

真の土台の上に築いていたところの、ごく少数の忠実な建設者たちは、このようなくずく等しい偽りの教義が働きを妨害するために、困惑し妨げられた（コリント第一・三ノ一〇、一一参照。ネヘミヤの時代にエルサレムの城壁を築いた者たちのように、ある者たちは、「荷を負う者の力は衰え、そのうえ、灰土がおびたじしいので、われわれは城壁を築くことができない」と言うばかりになった（ネヘミヤ記四ノ一〇）。迫害、不正、罪悪、その他サタンが、彼らの働きの前進を妨げるために考案したさまざまな妨害との絶え間ない闘いに疲れて、さすがの忠実な建設者たちの中にも失望に陥る者があった。そして自分たちの財産と生命を守るために、彼らは真の土台から離れていった。しかし、敵の攻撃にもくじけずに、「あなたがたは彼らを恐れてはならない。大いなる恐るべき主を覚え」とよと大胆に宣言する者もあった（同・四ノ一四）。そして彼らは各自が腰に剣を帯びながら働きを推し進めたのであった（エペソ六ノ七参照）。

真理に対する同じ憎しみと反対の精神が、各時代の神の敵の心を満たしてきた。そして同じ警戒心と忠実さが神のしもべたちに要求されてきた。最初の弟子たちに言われたキリストの言葉は、終末に至るまでの弟子たちに言われたのである。「目をさましていなさい。わたしがあなたがたに言うこの言葉は、すべての人々に言うのである」（マルコ一三ノ三七）。

5 深まりゆく暗黒

暗黒はますますその濃さを増していくように見えた。聖像崇拜はいつそう広く行なわれるようになった。像の前に燈明があげられて、祈りがささげられた。最もばかげた迷信的な習慣が広まった。人々の心は迷信によって完全に支配されたので、理性そのものが失われてしまったかのように思われた。司祭や司教たち自身が享楽を愛し、肉欲にふけり、腐敗していたのだから、彼らの指導を仰いでいた民衆が無知と不道徳に陥るのは、当然のことであった。

さらに法王は、もう一つの僭越なことをした。すなわち十一世紀に法王グレゴリー七世は、ローマ教会は完全であると宣言したのである。その主張の中で彼は、聖書によれば教会はこれまで誤ったことはないし、これから

も誤ることがないと言明した。しかし聖書には、このような主張を裏付ける証拠はないのである。高慢な法王はまた、皇帝を退位させる権力があると主張し、自分が布告した宣言を破棄し得る者はだれもなく、一方他のすべての者の決定を取り消す権力が自分にはあると断言した(付録参照)。

こうした絶対無謬を唱えた法王の暴君的性格を示す顕著な実例は、ドイツ皇帝ハインリヒ四世(ヘンリー四世)に対する処置である。ハインリヒ四世は、法王の權威をあえて無視したために、破門と廢位の宣告を受けた。法王の命令に力を得て彼に反逆した諸侯たちの、離反と威嚇に驚いたハインリヒは、法王と和解する必要を感じた。彼は王妃と忠実な従者とを伴って、法王の前に身を低めるため、真冬のアルプスを越えた。グレゴリーが留まっていた城に到着すると、王は護衛もなく外庭に案内され、その厳しい冬の寒さの中で、みすばらしい衣を着、頭には何もかぶらず、はだしのまま、法王の前に出る許可を待った。彼が三日間断食とぎんげを続けた後、ようやく法王は彼に赦免を与えた。そしてそれさえも、皇帝が位に復して王権を行使する前に、法王の認可を仰がねばならないという条件付きのものであった。こうしてグレゴリーは、自分の勝利に意気揚々となり、王たちの誇りをはぐことが自分の義務であると誇った。

このこうまんな法王の横暴な態度と、キリスト——ゆるしと平和をもたらすために、心の戸の外に立つて、はいることを求めておられるキリスト、また弟子たちに、「あなたがたの間でかしらになりなれ」と思う者は、僕とならねばならない」(マタイ二〇/二七)と教えられたキリスト——の柔和と優しさとは、なんと異なっていることであろう。

6 誤った教義の数々

時代が進むにつれて、誤った教義がローマからやむことなく送り出されていった。法王制が確立する以前でさえ、異教の哲学者たちの教えが教会の中で注目され、影響を与えていた。改宗したという人々の多くは、依然として彼らの異教の哲学の教えに執着し、それを自分で研究するばかりでなく、異教徒の中で勢力を広げる手段として、他の人々にもそれを勧めた。こうして重大な誤りがキリスト教信仰のなかにもちこまれた。それらのうち特に目だつものは、人間は生来不死であつて、死んでも意識があるという信仰であった。この教義を基礎にして、ローマ教会は、諸聖人に祈りをさげることや、聖母マリヤを崇拜することを確立した。また早くから法王教の中に織りこまれていたところの、最後まで悔い改めない者は永遠の眞苦に会うという異端的な教えも、ここから起こったのである。

これに伴つてもう一つ異教のつくりごとが取り入れられることになった。ローマ教会はそれを煉獄と呼び、だまされやすく迷信的な民衆を脅すのに用いた。この異端的な教えによれば、永遠の滅びを受けるほどでない魂がその罪の罰を受けるべき苦しみの場所が存在し、そこで不純な状態から清められたとき天国にはいることを許される、というのである(付録参照)。

ローマ教会が、その信者たちの恐怖と悪行とを利用して益を得るためには、さらにもう一つのつくりごとが必要であつた。この必要は、免罪の教義によつて満たされた。法王の戦い——世俗的な主権を拡大し、敵を懲らしめ、法王の靈的至上権を否定する者たちを撲滅するための戦い——に参加するすべての者に、過去・現在・未來の罪の完全な赦免と、受けるべきすべての苦痛と罰の免除が約束された。また、教会に金を払うことによつて

罪から解放されること、そしてまた、苦しみの中にある死んだ友人たちの魂をも解放することができること、これらのことを人々は教えられた。このような方法によって、ローマ教会はその懐を肥やし、キリスト——まくらする所さえ持たれなかつたおかた——の代表者と称する者の豪華とせいたくと悪徳とを支えたのであつた（付録参照）。

聖書の礼典である主の晩餐は、ミサという偶像崇拜的犠牲にとつて代わられた。カトリックの司祭たちは、その無意味な儀式によって、ただのパンとぶどう酒を實際の「キリストの体と血」に変えたと主張した。彼らは、神を汚す傲慢さをもつて、万物の創造主であられる神を創造する力があると公言した。キリスト者たちはこの恐ろしい¹⁾渾神教的邪説を信じるように要求され、さもないと死刑に処せられるのであつた。これを拒んだために火刑に処せられた者が無数にあつた（付録参照）。

7 世界の真夜中

十三世紀に、法王制の機関中で最も恐ろしいもの、すなわち宗教裁判所（異端審問所）が設けられた。暗黒の君は、法王制の指導者たちと共に働いた。彼らの秘密会議においてサタンとその天使たちが、悪人たちの心を支配した。しかしそれと同時に、人の目にこそ見えなかつたが、神の天使がそのただ中に立ち、彼らの不法な命令の恐るべき記録をとり、とうてい人間の目が見るに耐えない恐ろしい行為の記録を記していたのであつた。「大いなるペビロン」は「聖徒の血に酔ひしれた」無数の殉教者たちの寸断された体は、この背信した権力に対する神のふくしゅうを呼び求めた。

法王教は世界の専制君主となつた。王も皇帝もローマ法王の命令に服した。人々の運命は、現世のものも来世のものも、彼の支配下にあるように思われた。数百年にわたつてローマの教義は、絶対的なものとして広く受け入れられ、その儀式は厳粛にとり行なわれ、その祝祭はあまねく温奉された。聖職者たちは尊敬され、豊かにさせられた。この時ほど、ローマ教会が大きな威厳と壮大さと権力を誇つた時代はなかつた。

しかし、「法王制の真昼は、世界の真夜中であつた」²⁾聖書は、民衆だけでなく、司祭たちにさえほとんど知られていなかつた。昔のバリサイ人たちと同様に、法王教の指導者たちは、彼らの罪を明らかにする光を増んだ。義の標準である神の律法を放棄してしまつたので、彼らは無制限に権力を行使し、自由に悪事を働いた。詐欺、貪欲、放とうが広く行なわれた。人々は、富と地位を得るためにはどんな罪でも犯した。法王や高位聖職者たちの宮殿は、最も罪深い放とうの現場であつた。何人かの法王たちはあまりにも非道な犯罪を犯したために、世俗の支配者たちが彼らとを、許すことのできない極悪な人物としてその地位から退かせようとしたほどであつた。ヨーロッパは、幾世紀もの間、学問、芸術、また文化の面で何の進歩もなかつた。キリスト教世界は、道徳的、知的なマヒ状態に陥つていた。

ローマ教会の権力下にあつた世界の状態は、預言者ホセアの言葉の恐ろしくも的確な成就である。「わたしの民は知識がないために滅ぼされる。あなたは知識を捨てたゆえに、わたしもあなたを捨て、……あなたはあなたの神の律法を忘れたゆえに、わたしもまたあなたの子らを忘れる。」「この地には真実がなく、愛情がなく、また神を知ることもないからである。ただのろいと、偽りと、人殺しと、盗みと、姦淫することのみで、人々は皆荒れ狂い、殺害に殺害が続いている」（ホセア書四ノ六、一一、一二）。これが神の言葉を捨てた結果であつた。

PAGE 7

8 注

- 1 Cardinal Wiseman, "The Real Presence of the Body and Blood of Our Lord Jesus Christ in the Blessed Eucharist, Proved From Scripture," Lecture 8, sec. 3, par. 26.
- 11 J. A. Wylie, "History of Protestantism," b. 1, ch. 4.

You have just read all or most of *chapter 3* from the book, *The Great Controversy*, in the *Japanese Language*. This chapter, other chapters, and part or all of the entire book are available on special order in quantity amounts in 23 languages

PRINTED BY:
TRAIL GUIDES - BOX 300, ALTAMONT, TN 37301 USA

FOR FURTHER INFORMATION AND LITERATURE, PLEASE CONTACT:

預言に現われたアメリカ合衆国

聖所と神の律法

「そして、天にある神の聖所が開けて、聖所の中に契約の箱が見えた」(黙示録二一ノ一九)。神の契約の箱は、聖所第二の部屋、至聖所にある。「天にある聖所のひな型と影」であった地上の幕屋の奉仕においては、この部屋は、大いなる贖罪の日に聖所の清めのために開かれるだけであった。したがって、天にある聖所が開かれて、契約の箱が見えたという告知は、一八四四年に天の至聖所が開かれて、キリストが贖罪の最後の働きをするためにそこに入られたことを示している。至聖所において奉仕を始められた大祭司に、信仰によって従った人は、彼の契約の箱を見た。彼らは、聖所の問題を研究して、救い主の奉仕が変わったことを理解するようになっていた。そして彼らは、彼が今、神の箱の前で務めをなし、ご自分の血によって罪人のために噴願しておられるのを見たのであった。

地上の幕屋の箱には、神の律法が刻まれた二枚の石の板が入っていた。箱は、ただ律法の板の容器にすぎなかったが、神の律法が入っていたために、それに価値と神聖さがあつたのであった。天にある神の聖所が開かれたとき、契約の箱が見えた。天の聖所の至聖所の中に、神の律法がたいせつに安置されている。それは、神ご自身がシナイの雷鳴の中で語り、ご自分の手で石の板に書かれた律法であった。

天の聖所にある神の律法は、大いなる実体であつて、石の板に刻まれ、モーセによって五書の中に記録された戒めは、その正確な写しである。この重要な点を理解するに至つた人々は、こうして、神の律法の不変性を知るようになった。彼らは、「天地が滅び行くまでは、律法の一点、一面もすたることはなく、ことごとく全うされるのである」といふ救い主の言葉の力を、これまでになく悟つた(マタイ五ノ一八)。神の律法は、神のみこころの啓示であり、神の品性の写しであるから、「天における忠実な証人のように」(英語訳)永遠に続かなければならない。一つとして廃された戒めはない。一点、一面も変更されてはいない。「主よ、あなたのみ言葉は天においてとこしえに堅く定まり、「すべてのごまとは確かである。これらは世々かきりなく堅く立ち」と詩篇記者は言っている(詩篇一九ノ八九、一一ノ七、八)。

神の律法とその第四條

最初に布告されたときと同様に、第四條は、十戒の中心の位置を占めている。「安息日を覚えて、これを聖とせよ。六日のあいだ働いてあなたのすべてのわざをせよ。七日目はあなたの神、主の安息であるから、なんのわざをもしてはならない。あなたもあなたのむすこ、娘、しもべ、はしため、家畜、またあなたの門のうちにいる他國の人もさうである。主は六日のうちに、天と地と海と、その中のすべてのものを造つて、七日目に休まれた

からである。それで主は安息日を祝福して聖とされた」(出エジプト記二〇ノ八—一)。

神の靈が、これらみ言葉の研究者たちの心に感動を与えた。彼らは、自分たちが創造主の休みの日を無視して、知らずにこの戒めを犯していたことを悟らされた。彼らは、神が清められた日の代かりに週の第一日を守るその理由を調べ始めた。最初に、第四条が廃されたとか、安息日が変更されたとかいう証拠を、聖書の中に見つけることができなかった。彼らに七日目を聖別した祝福は、取り除かれてはなかった。彼らは真心から、神のみこころを知り実行しようとしていた。そして今、彼らは、自分たちが神の律法の違反者であることを知って、深く悲しんだ。そして、神の安息日を清く守ることによって、神への忠誠を表わした。

彼らの信仰を覆そうとして、さまざまな熱心な働きかけがなされた。地上の聖所が、天の聖所の象徴であり、ひな型であるならば、地上の箱の中の律法は、天の箱の中の律法の正確な写しである、ということも、だれの目にも明白なことであった。そして、天の聖所に関する真理を信じることは、神の律法の要求を認め、第四条の安息日の義務を認めることを必然的に伴う、ということも明白である。ここに、天の聖所におけるキリストの奉仕を明らかにする、調和のとれた聖書解釈法に対して、きびしく断固たる反対が起こる原因があった。人々は、神が開かれた門を閉ざし、神が閉じられた門を開けようとした。しかし、「開けばだれにも閉じられることがなく、閉じればだれにも開かれることのない者」が、「見よ、わたしは、あななの前に、だれも閉じることのできない門を開いておいた」と宣言しておられた(黙示録三ノ七、八)。キリストは、至聖所の門を、つまり、その務めを、お開きになった。そして、光が、天の聖所のその開かれた門から輝いていた。そして、そこに置かれた律法の中に第四条の戒めが含まれていることが示された。神が確立されたものを、だれも覆すことはできなかった。

キリストの仲保と神の律法の永遠性に関する光を受け入れた人々は、これらが黙示録一四章に示された真理であることを見いだした。(一)章のメッセージは、主の再臨のために地上の住民に準備をさせる三重の警告から成っている(付録参照)。「神のさばきの時がきた」という告知は、人類の救いのためのキリストの務めの最後の働きを指している。それは、救い主のとりなしが終わり、彼がご自分の民を迎えるために地上に帰られるまで宣布しなければならぬ真理を伝えるものである。一八四四年に始まった審判の働きは、生きている者も死んだ者も、すべての者の運命が決定されるまで継続しなければならない。したがって、これは、人類の患患期間の終わりまで続くのである。人々に審判に立つ準備をさせるために、メッセージは、「神をおそれ、神に栄光を帰せよ」(二)と地と海と水の源とを造られたかたを、伏し拝め」と彼らに命じている。これらのメッセージを受け入れる結果は、「(一)に、神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持ちつづける聖徒の忍耐がある」という言葉で表わされている。審判に対する備えをするためには、人は神の律法を守らなければならない。その律法が、審判の時の品性の規準となるのである。使徒パウロは、次のように言明している。「律法のもてて罪を犯した者は、律法によってさばかれる。…：神がキリスト・イエスによって人々の隠れた事からをさばかれるその日に」、また、彼は「律法を行う者が、義とされる」と言っている(ローマ二ノ二一—二六)。神の律法を守るためには、信仰が不可欠である。「信仰がなくては、神に喜ばれることはできない」(すべて信仰によらないことは、罪である)(ヘブル二ノ一六、ローマ二ノ四—二二)。

安息日の意味

2 第一天使は、「神をおそれ、神に栄光を帰せよ」、神を天地の創造主として礼拝せよと、人々に呼びかけている。

そうするためには、神の律法に従わなければならない。賢者は、「神を恐れ、その命令を守れ。これはすべての人の本分である」と言っている（伝道の書二ノ一三）。神の戒めに対する服従がないならば、どんな礼拝も神に喜ばれることはできない。「神を愛するとは、すなわち、その戒めを守ることである。」耳をそむけて律法を聞かない者は、その祈でさえも憎まれる（ヨハネ第一ノ五ノ三、箴言二八ノ九）。

神を礼拝する義務は、神が創造主であり、他のすべてのものはその存在を神に依存している、という事実に基づいている。そして、聖書の中で、異教の神々にまさって神が崇敬と礼拝を受けるべきであると示されているときは、常に、神の創造の力がその実証としてあげられている。「もろもろの民のすべての神はむなしい。しかし主はもろもろの天を造られた」（詩篇九六ノ五）。「聖者は言われる、「それで、あなたがたは、わたしをだれにくらべ、わたしは、だれにひとしいというのか。目を高くあげて、だが、これらのものを創造したかを見よ。」天を創造された主、すなわち神であって、…地を…造られた主はこう言われる、「わたしは主である。わたしはほかに神はない。」（イザヤ書四〇ノ二五、二六、四五ノ一八）。詩篇記者も言っている。「主こそ神であることを知れ、われらを造られたものは主であって、われらは主のものである。」「さあ、われらは拝み、ひれ伏し、われらの造り主、主のみ前にひざまずこう」（詩篇一〇〇ノ三、九五ノ六）。また、天において神を礼拝する聖者たちは、神をあがめるべきその理由として、「あなたこそは、栄光とほまれと力とを受けるにふさわしいかた。あなたは万物を造られました」と述べている（黙示録四ノ一一）。

黙示録一四章には、創造主を礼拝するようにと呼びかけが人々に対してなされている。そして、三重の使命の結果として、神の戒めを守る一団の人々が起ることを、預言は示している。これらの戒めの一つは、神が創造主であることを直接指示している。第四条は、次のように宣言している。「七日目はあなたの神、主の安息である。…主は六日のうちに、天と地と海と、その中のすべてのものを造って、七日目に休まれたからである。それで主は安息日を祝福して聖とされた」（出エジプト記二〇ノ一〇、一一）。安息日について、主は、さらに、それが「しるしとなって、主なるわたしがあなたがたの神であることを、あなたがたに知らせるためである」と言われる（エゼキエル書二〇ノ二〇）。そしてその理由は、「それは主が六日のあいだに天地を造り、七日目に休み、かつ、いこわれたからである」と言われている（出エジプト記三二ノ一七）。

「創造の記念としての安息日の重要さは、われわれがなぜ神を礼拝すべきであるかという真の理由を常に考えさせるところにある。」すなわち、神は創造主であって、われわれは神に造られたものだからである。「それゆえに、安息日は、礼拝の根底そのものである。というのには、安息日が、他のどんな制度よりも、最も感銘深い方法で、この大真理を教えているからである。七日目における礼拝だけでなく、すべての礼拝の真の根拠は、創造主と造られたものとの区別にある。この大実実は、決して廃することのできるものではなく、また決して忘れてはならないものである。」神がエデンで安息日を制定されたのは、この真理を常に人々の心に留めておくためであった。そして神がわれわれの創造主であるという事実が、神を礼拝する理由として存続するかがり、安息日は、そのしるし、また記念として、存続するのである。安息日がすべての人に守られ、人間の思いと愛情が、崇敬と礼拝の対象としての創造主に向けられていたならば、偶像礼拝者や無神論者や不信心者は決してでてこなかったことであろう。安息日を守ることは、「天と地と海と水の源とを造られた」真の神に対する忠誠のしるしである。それゆえに、神を礼拝し神の戒めを守ることを命じるメッセージは、特に第四条の戒めを守るよう人々に呼びかけるのである。

4 獣とは何か

第三天使は、神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持ち続ける者とは対照的に、別の一団を指摘している。そして彼らの誤りに対して、厳厲で恐ろしい警告が発せられている。「おおよそ、獣とその像とを拝み、顔や手に刻印を受ける者は、…：神の激しい怒りのおどろ酒を飲」む（黙示録一四〇九、一〇）。このメッセージを理解するには、ここに用いられている象徴を正しく解釈することが必要である。獣、像、刻印とは、いったい何を表わしているのだろうか。

これらの象徴が用いられている一連の預言は、黙示録二二章から、キリストを誕生の時に滅ぼそうとした龍から、始まっている。龍は、サタンであると言われている（同一二〇九）。救い主を殺すためにヘロデを動かしたのは、サタンであった。しかし、キリスト教時代の初期において、キリストと彼の民に戦いをいどんだサタンの主力は、ローマ帝国であり、そこにおいて最も有力な宗教は、異教であった。こうして、龍は、第一義的にはサタンを表わすが、第二義的には異教ローマの象徴である。

第三章（一一〇節）にはもう一つの獣が描かれていて、それは「ひよりに似ており」、龍は、「自分の力と位と大いなる権威とを、この獣に与えた」。この象徴は、なたいのプロテスタントが信じてきたように、かつて古代ローマ帝国が握っていた力と位と権威とを継承した法王権を表わしている。ひよりに似た獣について、次のように言われている。「この獣には、また、大言を吐き汚しことを語る口が与えられ、…：そこで、彼は口を開いて神を汚し、神の御名と、その幕屋、すなわち、天に住む者たちとを汚した。そして彼は、聖徒に戦いをいどんでこれに勝つことを許され、さらに、すべての部族、民族、国語、国民を支配する権威を与えられた」。ダニエル書七章の小さい角の描写とほとんど同じであるこの預言は、疑いもなく法王権を指している。

「四十二か月のあいだ活動する権威が与えられた」。そして、「その頭の一つが、死ぬほどの傷を受けた」と預言者は言っている。また、「とりこになるべき者は、とりこになつていく。つるぎで殺す者は、自らもつるぎで殺されねばならない」とある。四十二か月は、ダニエル書七章の「ひと時と、ふた時と、半時の間」つまり三年半、すなわち千二百六十日と同じで、その期間のあいだ、法王権は神の民を迫害するのであった。この期間は、すでに述べたように、法王権が至上権を握った紀元五三八年に始まり、一七九八年に終わった。この時、法王はフランス軍の捕虜になり、法王権は致命的な傷を受けた。「とりこになるべき者は、とりこになつていく」。

アメリカ合衆国の出現

PAGE 4

ここで、もう一つの象徴が紹介される。預言者は、次のように言っている。「わたしはまた、ほかの獣が地から上つて来るのを見た。それには小羊のような角が二つあった（一一一節）。この獣の外見と出現の様子はともに、それが表わしている国家が、それに先だってさまざまの象徴のもとに表わされた国々とは異なっているということを示している。世界を支配してきた強国は、「天の四方からの風が大海をかききた」たときに現われた猛獣として、ダニエルに示された（ダニエル書七ノ三）。黙示録一七章では、天使が、水は「あらゆる民族、群衆、国民国語」を表わしていると説明した（一五節）。風は、争闘を象徴している。天の四方からの風が大海をかききたるとは、諸国が権力を握るために起こした征服と革命の恐るべき光景を表わしている。

しかし、小羊のような角をもった獣は、「地から上つて来る」が見えなかったのである。このように表わされる国は、自国を確立するために他の諸国を覆すのではなくて、まだだれにも占有されていない領土に起こり、徐々にまた平和のうちに成長する国でなければならぬ。したがって、旧世界の込み合った争い合う国々の中、すなわち、あの「民族、群衆、国民、国語」の荒海の中からは起こり得ないのである。それは、西半球の大陸に求められねばならぬ。

一七九八年に、新世界のどんな国が、勢力を伸ばし、将来強大な国家になる可能性を示して、世界の注目を集めていたであろうか。この象徴が、どの国に適用されるかは、実に明白である。この予告の指示するところに合致する国は、ただ一つしかない。それは、疑いもなく、アメリカ合衆国を指している。弁論家や歴史家は、この国の起源と成長を描写するのに、無意識のうちに、聖書記者の思想を、またほとんど同じ言葉で、くり返し用いてきた。獣は、「地から上つて来る」が見えた。そして、翻訳者たちによれば、ここで「上つて来る」と訳されている言葉は、字義どおりには、「植物のように成長する、または、生える」という意味である。そして、すでに見たように、その国は、どの国にも占有されていない領土に起こらなければならない。ある有名な著者は、米国の出現を描写して、「その空虚からの出現の神秘」について語り、「黙した種子のように、われわれは成長して帝国になった」と述べている。「一八五〇年にヨーロッパのある雑誌は、米国のことを、「現われ出て」、「地の沈黙の中で、日ごとにその権力と誇りを増しつつある」不思議な帝国」と述べた。また、エドワード・エベレットは、同国の建設者である清教徒たちについての演説の中で、「彼らは、ライデンの小さな教会が良心の自由を享受することができるころを、人跡まれで、人目につかず、安全な遠隔の地に求めたのであろうか。彼らが、平和的征服のうちに、……十字架の旗をかかげた……巨大な地域を見よ」と言った。

5 アメリカの変貌

「それには小羊のような角が二つあつた。小羊のような角は、若々しさと無垢と温順さとを示すもので、一七九八年に「上つて来る」のを預言者が見たときの米国の性格をよく表わしている。最初、米國に逃れ、王の圧迫と司祭たちの迫害からの避難所を求めた亡命キリスト者たちの中には、政治的自由と宗教的自由の広い基盤の上に政府を樹立しようと決意したものが多くあつた。彼らの意見は、独立宣言の中に織り込まれ、「すべての人は平等に造られ」、「生命、自由、および幸福の追求」という奪うことのできない権利を与えられている、という偉大な真理の表明となつている。そして、憲法は、国民に自治権を保証し、一般投票によつて選ばれた代議員が法律の制定と執行にあたるべきことを規定している。宗教の自由も保証され、すべての人は良心の命じるところに従つて神を拝祭することが許されている。共和主義とプロテスタント主義が、国家の根本原則となつた。これらの原則が、その権力と繁栄の秘けつである。全キリスト教国の、圧迫され踏みにじられた人々が、関心と希望を抱いてこの国に目を向けた。幾百万という人々がその岸边にやつて来て、米國は、世界で最も強い国の一つに数えられるまでになつた。

しかし、小羊のような角をもった獣は、「寵のように物を言つた。そして、先の獣の持つすべての権力をその前で働かせた。また、地と地に住む人々に、致命的な傷がいやされた先の獣を拝ませた。……地に住む人々を惑わし、かつ、つるぎの傷を受けてもお生きている先の獣の像を造ることを、地に住む人々に命じた」(黙示録

この象徴の持つ、小羊のような角と龍のような声は、ここで表わされている国家の宣言と実行との著しい矛盾を示すものである。国家が「物を言う」とは、その立法および司法権の活動のことである。米國は、そのような行爲によって、国家の方針の基礎として宣言した自由と平和の原則を裏切るのである。それが「龍のように」語り、「先の獸の持つすべての権力」を働がせるといふ預言は、明らかに、それが、龍やびょうに似た獸によって象徴される國々が表わした狭量と迫害の精神を持つようになるといふことを予告している。そして、二つの角を持つた獸が「地と地に住む人々に、……先の獸を拜ませ」といふ言葉は、この國が権力を行使して、法王権に対する礼拝行爲となるような何かの遵守を強要することを示している。

このような行動は、この政府の原則、自由制度の精神、独立宣言の率直嚴肅な言明、そして憲法に、全く相反するものである。米國の建國に当たつた人々は、世俗の権力が教会のことに用いられて、その当然の結果として狭量と迫害が起こることを避けようと、賢明にも努めた。憲法には、「國會は、宗教の設立に関する、もしくはその自由な活動を禁ずる法律を制定してはならない」、また、「合衆國のいかなる公職につくに当たつても、その資格として、宗教的条件を課してはならない」とある。國民の自由を擁護するこれらの条項にはなほだしく違反することなしには、國權は、どんな宗教的法令も施行することはできない。しかし、そのような矛盾した行動をとることは、象徴に示されているとおりである。小羊のような角を持つた獸は、純潔柔和で悪意のないことを公言しながら、龍のように物を言うのである。

「地に住む人々を惑わし……(彼らに)獸の像を造ることを……命じた」ここに、立法権が國民にある政体が明示されている。これは、合衆國が預言に示された國であるといふきわめて顕著な証拠である。

6 政權と教權との提携

しかし、この「獸の像」とは何であらうか。そして、それは、どのようにして造られるものなのであらうか。この像は、二本の角をもつた獸によつて造られるものであり、先の獸に模した像である。それは、また、獸の像とも呼ばれている。したがつて、像が何であり、どのようにして造られるかを知るためには、獸そのもの、すなわち法王権の特徴を研究しなければならない。

初代教会は、福音の單純さを離れて墮落し、異教の儀式と習慣を受け入れたときに、聖靈と神の力を失つた。そして、人々の良心を支配するために、世俗の権力の援助を求めた。その結果が、法王権であつて、それは、國家の権力を支配し、それを教会自身の目的、特に「異端」の処罰のために用いた教会であつた。米國が獸の像を造るためには、宗教的権力が政府を支配し、教会が、教会自身の目的を遂行するために、國家の権力を用いるようにならなければならない。

教会が世俗の権力を握つた場合は常に、教会はそれを自分の教義に反対する者を罰するために用いてきた。世俗の権力と提携することによつてローマの範に従つたプロテスタント諸教会も、良心の自由を束縛しようとする同様の欲望を表わした。英國の國教会が、長年にわたつて反対者を迫害したことは、そのよい例である。十六世紀と十七世紀にわたつて、幾千といふ非國教徒の牧師たちが、教会を去らなければならなかつた。そして、牧師も信徒も、多くの者が罰金、投獄、拷問、殉教の憂き目にあつたのである。

初代教会が政府の支持を求めるようになったのは、背教のためであった。そして、これが、法王権—— 獣——の発展する道を開いた。「まず背教のことが起り、不法の者……が現れる」とパウロは言った（テサロニケ第二・二ノ三）。そのように、教会内の背教が、獣の像を造る道を開くのである。

アメリカと獣の像

7
聖書は、主の再臨に先だつて、初期の時代の状態に似た宗教的墮落の状態が起るといつている。「終りの時には、苦難の時代が来る。その時、人々は自分を愛する者、金を愛する者、大言壮語する者、高慢な者、神をそしめる者、親に逆らう者、恩を知らぬ者、神聖を汚する者、無情な者、融和しない者、そしめる者、無節制な者、粗暴な者、善を好まない者、裏切り者、乱暴者、高言をする者、神よりも快樂を愛する者、信心深い様子をしながらその実を捨てる者となるであろう」（テモテ第二・三ノ一—五）。「しかし、御霊は明らかに告げて言う。後の時になると、ある人々は、恐わす霊と悪靈の教とに氣をとられて、信仰から離れ去るであろう」（テモテ第一・四ノ一）。サタンは、「あらゆる偽りの力と、しるしと、不思議と、また、あらゆる不義の恐わしとを」もつて働く。そして、「自分らの教となるべき真理に対する愛を受けいれぬ」い者はみな、「彼らが偽りを信じるように、迷わす力」に陥つてしまうのである（テサロニケ第二・二ノ九—一）。こうした不信の状態に達したときに、初期の時代におけると同様の結果が生じるのである。

プロテスタント教会内の大きな信仰の差異は、どんなに努力しても一致を図ることはできないということの決定的証拠であると考えられる人々が多い。しかし、ここ数年にわたつて、プロテスタントの諸教会内において、共通の教義を土台として合同しようとする氣運が強く動き出している。このような合同を達成するためには、たとひ聖書的見地からどんなに重要なものであつても、すべての者が一致しない問題は、必然的に放棄されねばならなくなる。

一八四六年、チャールズ・ビーチャーは、ある説教の中で次のように言明した。「福音主義のプロテスタント諸派の牧師たちは、単なる人間の恐怖にはなだしく打ちひしがれているだけでなく、根本的に腐敗した状態のものに生き、動き、呼吸している。そして、常に、自分たちの性質のあらゆる卑しい要素に訴えて、真理については沈黙し、背教の勢力にはひびをかかめている。これは、ローマが行なったことではなかったか。われわれもまた、同じことをしているのではなからうか。そして、われわれは、前途に何を見るであらうか。それは、もう一つの全体会議、世界大会、伝道同盟、そして共通の信条ということである」これが達成されるならば、そのときは、完全な合同を確保するには、ただ一歩進んで暴力に訴えればよいのである。

米国の主要な教会が、その共通の教理において合同し、国家を動かして教会の法令を施行させ、教会の制度を支持させるようになるそのときに、プロテスタント・アメリカは、ローマ法王制の像を造り、その必然の結果として、反対者たちに法律上の刑罰を加えることになるのである。

獣の刻印とは何か

二つの角を持った獣は、「また、小さき者にも、大いなる者にも、富める者にも、貧しき者にも、自由人にも、奴隷にも、すべての人々に、その右の手あるいは額に刻印を押させ、この刻印のない者はみな、物を買うことも売ることでもできないようにした。この刻印は、その獣の名、または、その名の数字のことである」（黙示録二三ノ一六、一七）。第三天使の警告は、「おおよそ、獣とその像とを拝み、額や手に刻印を受ける者は、神の怒りの杯……を飲」むと告げている。このメッセージの中にあげられている「獣」、それを礼拝するようにと二つの角を持った獣が強制するところの獣は、黙示録一三章の最初の獣、すなわちひょうに似た獣——法王制——のことである。「獣の像」は、プロテスタント諸教会が自分たちの教義を強制するために公権力の助けを求めるときに起きてくるところの、そうした背教のプロテスタント教会を表わしている。ここで、さらに、「獣の刻印」が明らかにされなければならない。

預言は、獣とその像とを拝することについて警告したあとで、「ここに、神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持ちつづける聖徒……がある」と宣言する。神の戒めを守る人々が、獣とその像とを拝み、その刻印を受ける者たちと、このように対照されていることから見ると、神を拝む者と獣を拝む者との間の区別は、一方は神の戒めを守り、他方はそれを犯すことにあるとわかる。

獣の特徴、したがって、その像の特徴は、神の戒めを破ることである。ダニエルは、小さい角、すなわち法王制について、次のように言っている。「彼はまた時と律法とを変えようと望む」（ダニエル書七ノ一五）。そして、パウロは、この同じ権力を、神よりも自分を高める「不法の者」と呼んだ。一つの預言は他の預言を補足する。法王制は、神の律法を変更することによってのみ、自らを神よりも高くすることができたのである。だれであっても、こうして変更された律法を、それと知りつつ守るならば、律法を変更した権力に最高の栄誉を帰していることになる。法王制の律法に従うこのような行為は、神のかわりに法王に忠誠を誓うしるしとなるのである。

法王制は、神の律法を変更しようとした。偶像礼拝を禁じる第二条を律法から除去し、第四条は、七日目のかわりに第一日を安息日として守ることを公認するように変更された。しかし、法王側の人々は、第二条を除去したことを、それは第一条に含まれているから不必要であり、われわれは神がわれわれに理解させたいと望んでおられるとおりに律法を与えたのであると主張する。これは、預言者が預言したところの変更ではない。預言されたその変更は、計画的で故意の変更である。すなわち「彼はまた時と律法とを変えようと望む」。第四条の変更こそ、まさしくこの預言の成就である。これに関して主張できる権威は、ただ教会の権威のみである。ここに書いて、法王権は、公然と自らを神よりも高めているのである。

聖書の十誡

出エジプト記20：3—17

I

あなたはわたしのほかに、なにものをも神としてはならない。

II

あなたは自分のために、刻んだ像を造ってはならない。上は天にあるもの、下は地にあるもの、また地の下の水のなかにあるものの、どんな形をも造ってはならない。それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神であるから、わたしを憎むものには、父の罪を子に報いて、三、四代に及ぼし、わたしを愛し、わたしの戒めを守るものには、恵みを施して、千代に至るであろう。

III

あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。主は、み名をみだりに唱えるものを、罰しないでは置かないであろう。

IV

安息日を覚えて、これを聖とせよ。六日のあいだ働いてあなたのすべてのわざをせよ。七日目はあなたの神、主の安息であるから、なんのわざをもしてはならない。あなたもあなたのむすこ、娘、しもべ、はしため、家畜、またあなたの門のうちにいる他国の人もそうである。主は六日のうちに、天と地と海と、その中のすべてのものを造って、七日目に休まれたからである。それで主は安息日を祝福して聖とされた。

V

あなたの父と母を敬え。これは、あなたの神、主が賜わる地で、あなたが長く生きるためである。

VI

あなたは殺してはならない。

VII

あなたは姦淫してはならない。

VIII

あなたは盗んではならない。

IX

あなたは隣人について、偽証してはならない。

X

あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、しもべ、はしため、牛、ろば、またすべて隣人のものをむさぼってはならない。

ローマ・カトリックの十誡

「カトリック要理」より

I

われはなんじの主なり、われのほか何者をも神となすべからず。

II

なんじ、神の名をみだりに呼ぶなかれ。

III

なんじ、安息日を聖とすべきことを寛ゆるべし。

IV

なんじ、父母を敬うべし。

V

なんじ、殺すなかれ。

VI

なんじ、かんいんするなかれ。

VII

なんじ、盗むなかれ。

VIII

なんじ、偽証するなかれ。

IX

なんじ、人の妻を望むなかれ。

X

なんじ人の持ち物をみだりに望むなかれ。

神を拜む者たちが、第四条を尊重することによって特に目だつ——なせならこれは、神の創造の力のしるしであり、神が人間に崇敬と服従を要求なさるその証拠だからである——のに対し、獸を拜む人々は、創造主の記念を踏みにじり、ローマの制度を高めようと努めることによって目だつものとなる。法王制が最初にその高慢な主張をしたのは、日曜日のためであった(付録参照)。そして、最初に国家の権力の助けを求めたのは、日曜日を「主の日」として守ることを強制するためであった。しかし聖書は、主の日として、第一日ではなくて七日目をさしている。キリストは、「人の子は、安息日にもまた主なのである」と言われた。第四条の戒めには、「七日目はあなたの神、主の安息日である」と言われている。そして、主は、預言者イザヤによって、その日を「わが聖日」と呼ばれた(マルコ二ノ二八、イザヤ書五八ノ一二)。

安息日を変更したのはキリストであると言われるが、キリストご自身の言葉が、そうでないことを証明している。彼は、山上の垂訓の中で次のように言われた。「わたしが律法と預言者を廃すためにきた、と思つてはならない。廃するためではなく、成就するためにきたのである。よく言つておく。天地が滅び行くまでは、律法の一点、一画もすたすることはなく、ことごとく全うされるのである。それだから、これらの最も小さいいましの一つでも破り、またそうするように人に教えたりする者は、天国で最も小さい者と呼ばれるであろう。しかし、これをおこないまたそう教える者は、天国で大きいなる者と呼ばれるであろう」(マタイ五ノ一七一―一九)。

安息日の変更について聖書の根拠がないことは、プロテスタントが一般に認めている事実である。これは、米
国トラクト協会と米国日曜学校同盟が発行した出版物の中に明らかに記されている。これらの書物の一つは、「安息日(週の第一日、日曜日)」に関して、新約聖書には、なんら明白な命令もなければ、その遵守に関する明確な規則も記されていない」と認めている。[※]

他の者は次のように言っている。「キリストが死なれるまで、日の変更はなかった。」そして「記録によるかぎり、彼ら(使徒たち)は、……七日目の安息日を廃止して週の第一日を守るようにさせるような、どんな明白な命令をも与えてはいない。」[†]

ローマ・カトリック教徒は、彼らの教会が安息日を変更したことを認め、プロテスタントが日曜日を守るのはカトリック教会の権威を認めることであるという。カトリック教会の教理問答には、第四条の戒めに従つて守るべき日についての質問の答として、次のように書いてある。「古い律法の時代には、土曜日が聖日であった。しかし、教会は、イエス・キリストの教えと神の霊の指導の下に、日曜日を土曜日の代わりにした。それゆえに今、われわれは、七日目でなくて、第一日を聖なる日とする。日曜日が、今では、主の日である。」

カトリックの著者たちも、カトリック教会の権威のしるしとして、「安息日を日曜日に変更したという、まさにその行為」を挙げ、それは「プロテスタントも承認している。……彼らは日曜日を守ることによって、祝祭日を制定し人々を罪に定める教会の権威を、認めているのである」と言っている。[‡]とするならば、安息日の変更は、ローマ教会の権威のしるし、あるいは刻印、すなわち「獸の刻印」でなくて何であらうか。

ローマ教会は、その至上権の主張を撤回してはいない。そして、世界とプロテスタント諸教会は、聖書の安息日を拒否して、ローマ教会が造った安息日を受け入れるときに、事実上この主張を認めるのである。彼らは、その変更は伝承や教父たちの權威によるものであると主張するかもしれない。しかし、そうすることによって、彼らは、「聖書、しかも聖書のみが、プロテスタントの宗教である」という、彼らをローマから隔っている原則そのものを無視するのである。法王教徒は、彼らがこの事実^に故意に目を閉じて、自分たちを欺いているのを見ることができるといえる。日曜休業運動が世に迎えられられるにつれて、法王教徒は、やがては全プロテスタント世界がローマの旗の下にくだることを確信して喜ぶのである。

ローマ教徒は、「プロテスタントの日曜日遵守は、彼らが、それとは気づかずに、^ハカトリック^ク教会の權威に従っているのである」と宣言している。⁶プロテスタント諸教会が、日曜日遵守を強要することは、法王制、すなわち獣を拜むことを強要することである。第四条の要求を知りながら、真の安息日の代わりに偽物を守ることを選ぶ者は、そうすることによって、それを命じた唯一の權威に敬意を表しているのである。しかし、宗教的義務を世俗の権力によって強制するという行為そのものによって、教会自身が獣の像を作るに至る。それゆえに、米国における日曜日遵守の強制は、獣とその像の礼拝の強制となるのである。

しかし、過去においては、聖書の安息日を守っていると信じて、日曜日を守ってきたキリスト者たちがいた。また、日曜日は神が定められた安息日であると心から信じている真のキリスト者たちが、今も各教会におり、ローマ・カトリック教会も例外ではない。神は彼らの真剣な心と神の前での誠実さを受け入れられる。しかし、日曜日遵守が法律によって強いられ、真の安息日を守るべきことが世界に明らかにされるその時に、神の戒めを破って、単にローマの權威によるものにすぎないところの戒めに従う者は、それによって、神よりも法王教をあげるのである。そのような人は、ローマに敬意を払い、ローマが定めた制度を強制する権力に敬意を払っている。彼は、獣とその像を拜んでいる。こうして、神がご自分の權威のしるしであると宣言された制度を拒んで、その代わりに、ローマがその至上権のしるしとして選んだものを尊重するときに、人々は、それによって、ローマに対する忠誠のしるし、すなわち「獣の刻印」を受けするのである。こうして、この問題が人々の前に明らかに示されて、神の戒めと人間の戒めのどちらかを選ばねばならなくなつたとき、それでも神の戒めを犯し続ける人々が、「獣の刻印」を受けるのである。

二種類の人々

これまで人類に与えられたことのない恐ろしい威嚇の言葉が、第三天使の使命の中に含まれている。あわれみを混じえない神の怒りをひき起こすものは、恐ろしい罪に違いない。この重大なことについて、人々は、無知のままであってはならない。この罪に対する警告は、神の罰が下る前に世界に伝えられなければならない。それはいずれの者が、罰を受ける理由を知り、それを逃れる機会が与えられるためである。預言は、第一天使が「あら

ゆる国民、部族、国語、民族」に布告すると言っている。同じ三重の使命の一部である第三天使の警告は、同じ範囲に及ぶのである。預言の中で、それは、中空を飛ぶ天使によって大声で宣言されるものとして表わされている。そして、それは世界の注目をひくのである。

この争いの結果、全キリスト教世界は二種類の人々に分けられる。すなわち、神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持つ者と、獣とその像とを拝み、その刻印を受ける者としてである。教会と国家とが力を合わせて、「小さい者にも、大いなる者にも、富める者にも、貧しき者にも、自由人にも、奴隷にも、すべての人々に」「獣の刻印」を受けるように強制しても（黙示録一三ノ一六）神の民は、それを受けない。バトモスの預言者は、「このカラスの海のそばに、獣とその像とその名の数字とにうち勝った人々が、神の立琴を手にして立って」「モーセの歌と小羊の歌とを歌って」いるのを見るのである（黙示録一五ノ二、三）。

注

- 一 J. N. Andrews, "History of the Sabbath," ch. 27.
- 二 G. A. Townsend, "The New World Compared With the Old," p. 462.
- 三 The "Dublin Nation."
- 四 Speech delivered at Plymouth, Massachusetts, Dec. 22, 1824, p. 11.
- 五 Sermon on "The Bible a Sufficient Creed," delivered at Fort Wayne, Indiana, Feb. 22, 1846.
- 六 George Elliott, "The Abiding Sabbath," p. 184.
- 七 A. E. Waffle, "The Lord's Day," pp. 186-188.
- 八 Henry Tuberville, "An Abridgement of the Christian Doctrine," p. 58.
- 九 Mgr. Segur, "Plain Talk About the Protestantism of Today," p. 213.

12

You have just read all or most of **chapter 25** from the book, *The Great Controversy*, in the *Japanese Language*. This chapter, other chapters, and part or all of the entire book are available on special order in quantity amounts in 23 languages.

PRINTED BY:

TRAIL GUIDES - BOX 300, ALTAMONT, TN 37301 USA

FOR FURTHER INFORMATION AND LITERATURE, PLEASE CONTACT: